

実践的授業展開ができる教員養成の検討

駒 田 聡 子

要旨：教員を目指す学生の家庭生活や実社会・実生活といった生活を学習対象とし、学習方法として実践や体験を通じて学ぶ家庭科、総合的な学習の時間において、児童が主体的に学び、学ぶことの意義を実感できる学習環境整備能力・資質向上を目指し、家庭科の講義における授業改善を行った。その授業評価の形で学生にアンケートを採り、実践的な授業展開が行える教員養成について検討をした。その結果、学生自身がさまざまな生活体験に主体的に関わることで生活課題に気づく姿勢が養われる、自分の力で課題や作品作りをやり遂げられる過程を整えられることで達成感を得られそれが学びに向かう力となる、教師自身が幅広い知識や雑学に加え体験を通じて学び一つのテーマを教科横断的に考察する深い教材研究力が、子どもとの信頼感や学ぶ意義を感じる授業構築に必要である、などの評価が得られた。また、一つ一つの体験の中でしつづけを重視する姿勢が、学びに向かう授業環境のためには重要であることも認識された。学生の生活力低下が著しい今日、実践を通していねいな指導が学生の実感を伴った指導力向上に有効であることが示唆された。

キーワード：教員養成、家庭科、総合的な学習の時間、実践的な授業

1. はじめに

小学校学習指導要領総則（平成29年6月）には、「児童が学ぶことの意義を実感できる環境を整え、一人一人の資質・能力を伸ばせるようにしていくことは、教職員をはじめとする学校関係者はもとより、家庭や地域の人々も含め、様々な立場から児童や学校に関わる全ての大人に期待される役割である。」と記されているが、これは言い換えれば「学ぶことの意義を実感させられる学習環境整備能力」が教員に求められる資質だといえる。更に学びの方法として、「教員による一方的な講義形式かの教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称、学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る（中教審答申平成24年8月）」とし、いわゆる「アクティブ・ラーニング学修」の授業作りを求めている。

しかしながら家庭科の学修方法は、アクティブ・ラーニング学修が文部科学省から提唱されるずっと以前、前報¹⁾に示した教科成立時から座学

だけではなく調理実習、被服実習のように、児童同士が意見を出し合い活動し合うグループ学習、すなわちアクティブ・ラーニング学修の授業形態であった。また高等学校家庭科では「ホームプロジェクト」といって、生徒自身が生活の中から課題を見だし（目的の設定）、課題解決のための計画の立案、計画の実施、その評価と反省というプロセスを踏む「課題探索型カリキュラム」も組み込まれていた。

新学習指導要領から教科となった「総合的な学習の時間」は、家庭科と同じく学修方法として問題解決や探求活動に主体的、創造的、協同的に取り組むことが求められている。更に教科の学びの対象が家庭科は「家庭生活」であり、総合的な学習の時間は「実社会や実生活」で、共に児童が生活している「実生活空間」である。そのため、両科目とも生活に関わる全ての事象が学習対象と幅が広く、教科横断的学習が必要となってくる。また教科の目標も、家庭科は「生活をよりよくしようと工夫する実践的態度を養う」、総合的な学習の時間が「よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを

目指す」とされ、共に「よりよく生きようと主体的に考え生きていく資質・態度を育成」ことを目標としている。

授業作りの「教材選び」視点からみると、学びの対象が「実生活空間」という児童の個々の家庭や家庭・家族の価値観、住んでいる地域社会により全く異なりそのファクターも多様であるので、何を個々の授業の学習対象とし、それを使って何を教え児童の成長につなげていくか、あるいはいけるのかということに関しては教えていく教員側の資質・教育能力が問われる。しかし、前報でも述べたが教員になろうとする学生自身の生活経験・体験が非常に乏しく、生活力低下が著しい。(細かい例だが、缶切りを使えない学生がほとんどである)このような学生たちの姿を見ると、家庭科の究極の目標である「よりよい家庭生活を考える」＝「便利な家電製品、声さえ掛ければ全てを電化製品が作動する」になりかねない危惧も感じられる。また、道具や用具を使用したまま放置し、次に使う人のことを考えて元に戻し整頓するということができない者も多いなど、人間性、社会性の面でも教員となって人を育てる立場となる資質が備わっているのか疑問に思うことが多い。

またアクティブ・ラーニング学修については、学生たちの教育実習での授業展開を見ていると、児童にグループ学習を行わせディスカッションを行わせグループの意見を発表させるが、ただ意見を出し合うだけでディベートになっておらず、学生が立てた指導案の「本時の目標」にとにかく流れを持って行こうとして、児童の意見が結局生かされないままで終わってしまっているケースが多い。このような状況は、教育実習生の授業に限らない。一例だが、小学校の総合的な学習の時間の公開授業で地域の人との関わりながら農作物に対する生産者の思いを知り、子どもたち自身の地域愛を育てようという授業を観る機会があったが、児童がそれぞれに聞き取った内容についてグループワークの後意見を出すだけで終わってしまい、「たくさん意見を出したけれど、いったい何を学んだんだろう」という消化不良の印象が残る授業となっていた。いずれの授業でも児童が自主的に

意見を出し合う授業展開が行われてはいるが、最終的な「落としどころ」、すなわち「子どもが学びを通じて何を学び、どのように育った」のかがみえていない。

そこで本年度は昨年度に提案した授業改善内容を更にていねいに見直し、児童にとって「主体的に学びたいような授業とは何か」を教師目線で考えられるように工夫をした。今回はその授業評価を通じ、家庭科、生活科、総合的な学習の時間という生活を学習対象とする科目において、学ぶ意義を感じる実践的な授業展開が行える教員養成について検討を加えることを目的とする。

2. 方法

1. 授業改善：昨年度までの授業の自己評価をもとに授業改善を加える。

2. 調査：

(1)調査対象、回答者数 三重大学生 104名
本学で教科教育に関わる授業が春学期にはないため、同授業を行った三重大学にて授業評価の形で、自由記述で授業評価をとりその結果をもとに検討を加える。

(2)調査時期 平成30年7月
(第15回目の授業時間内)

3. 結果

3-1. 本年度の授業改善

昨年度までの授業の在り方に、以下のような改善を加えた。

(1)知識定着の細やかな確認

これまで自分が担当した生活科と家庭科の講義の中では、基本的な生活用語や生活技術については高等学校までの学びや日常生活の中で既習事項として身につけていると思っていたので、それらについて確認したことがなかった。

しかし、実践に入ると「食材の切り方」、「水からゆでる食材と湯からゆでる食材」、「米の研ぎ方」、「繊維の名前と種類」、「洗剤の液性」、など上げだしたら切りがないが、ほとんどのことが身につけていないと言っている状態であった。そこで、単

元ごとに小テストを実施して知識・技術の既修の程度、定着具合をこれまで以上に細かく確認を行うことにした。

(2) しつづけを厳しくする

三重大大学附属小学校では、児童に対して「意見を発表するときには、きちんと椅子を引いて立ち、クラスの友だちの方を向いてていねいな日本語で説明をする」ことを、1年次からしつづけている。岐阜県内小学校でも意見を発言するときの態度や、話を聴く態度は厳しくしつづけをしていて、授業中クラス全員が人の話をきちんと聴き、意見を求められたらほぼ全員が主体的に手を上げて意見を出す全員参加の整然とした授業が展開されていて、授業に臨む態度が身についていた。しかし、本学学生の実習中の様子を見ると、授業中、学生がため口で授業を展開してそのままため口で児童と会話をしていたり、先生と意見を述べる児童の間で向かい合って意見交換をしてクラスの子の方を向いてなど、教師を目指す学生自身に授業に臨む態度が身についていない様子がうかがえた。その結果として、クラス全体の雰囲気としても締まりがなく、学びに向かいあう状態ではなかった。そこでいずれの講義でも挨拶はもちろんのこと、授業中に関係がないものの使用の禁止、私語を慎むこと、当てられて意見を述べるときは学生の方を向いて理路整然と話をすることを求め、授業を成立させるためには「しつけやけじめ」が大切であることを伝えた。

具体的には、授業前後の挨拶、教員に対する敬語の使用、携帯電話やスマートフォン使用の厳禁、物品の後片付けや教室の整理整頓など、ごくごく当たり前の行為だが、それらを徹底させた。更に学生同士で注意し合うように指導をした。(例えば、糸くず数mmでも落ちていたらクラス全体の授業を停止するなど。言葉は悪いが「一蓮托生」で責任を取ることを伝えた。)その他、調理実習でも片付けの徹底(五徳を洗う、流しに熱湯を掛ける、流しの水分を拭き取る、スポンジは絞らせ、一括管理する、まな板は漂白するなど)をさせた。

(3) 自ら考える一教師の立場になったときの意識付け

これまでの授業では、授業時間が少ない中で実

習を行うので必要物品の準備を教員が行い簡単にできるキットを使っていた。しかしその結果、学生の授業態度が「全てが用意されていて当たり前」といった「お客様」になっていた。言い換えれば、何か不備や自分たちが必要物品がでたときにすぐに教員に訴えて満たしてもらおうとして、自分たちで考えず「全て聞けば済む」感じとなっていた。大学は恵まれた環境で授業ができるが、公立学校に行けば必要な物品がない、あるいは使えないという状況が多々ある。また今は大学教員に聞けば済むかもしれないが、将来教員となって児童から聞かれる立場である。自分たちがスムーズに授業を行うために、考えていく立場である。そこで、「聞けば済む」という意識を変え、自分たちが教員となる立場で作業を行っていくという意識も育むために、学生自身が次の作業では何が必要となるかを考え、必要なものは個人で購入して用意させた。(ボビンなど)。また、ミシンなどの使い方やトラブル時の対処は、教科書をよく読ませ自分たち考え使える状態にする、それでも分からないときは分厚いミシンの説明書を渡して熟読させ、解決するようにした。

(4) 教科横断的な学びを意識させる

味噌という食材一つとっても、原材料、作り方、発酵食品とは、地域による味噌のちがいが、味噌を使った料理、味噌汁を作るときも味噌を入れるタイミング、味噌の原料となる大豆に関しては、種類、育ち方、あぜ豆としての歴史、食糧自給率など、様々な教科の内容とつながっていく。それを知ること意識して学ぶことが教材研究そのものである。学生には、教科横断的に家庭内の事柄を見ることを伝え、教材研究の視点を教えた。

(5) なぜ(原理)を考えさせる

生活技術は全て「より早く、より美しく、よりおいしく」できるための、理論に裏打ちされた原理(調理の場合、調理科学)がある。それを理解すると、生活を考えて創造しようとするときに応用が利く。また、児童から質問が来たときに単に「こうすればいい」言うのではなく「これはこういう仕組みだから、こうなっているのだよ」と伝えることで児童により理由が伝わることになり、彼ら自身も何かにぶつかったときに、「考えて行

動する人に育つ」と考えられる。そのため、生活技術の理論についてまずはなぜ教えなければいけないかを理解をさせ、更にそれについてしっかりと教えられる資質を育てることを目指した。

(6) 基礎の基礎を教える

前報でも述べたが、これまでは小学校家庭科の

内容全般を網羅しようとして自身の授業内容をはしょるところがあり、結局それが学生の知識定着の甘さになっていた。その反省から、今年度は特に「より良い生活を送るために重要な内容」を選び、家庭生活をよりよく過ごすための「基礎の基礎」を表1の通り更に具体的に示し教えた。

表1 基礎の基礎となる内容

1. 家庭科とは、小学校家庭科で育む、知識、技術、態度を家庭科学習指導要領をもとに学ぶ
 - ①教科の学習対象→家庭生活、②目標、③内容、④学びの特徴→実践的・体験的な活動を通して学ぶ
2. 繊維の種類
 - ①実際に繊維見本に触らせ、それぞれの繊維の種類、特徴について理解をする
 - ②ウールは、＝羊毛ではないことを伝える、アルパカ、カシミヤ、アンゴラ
 - ③「混用」とは、そのメリットを考える、その際、自分が着ている服の組成表示を調べて「なぜ」その組成なのかについて、考察をさせる
3. 被服管理（繊維種類別管理方法）
 - ①洗剤の選択（液性） ②漂白剤の選択（液性）
 - ③絞り方、干し方 ④アイロンの温度 ⑤被服の保管
 - ⑥自身が持っている被服の表示を調べる（サイズ、組成、取り扱い絵表示）

手洗いについて、実践するように記されているが、現在の私たちの生活の中で、手洗いはほとんど行われる機会はなく現在の生活とかけ離れている。したがって、自分の授業では手洗いはあえてやらない。また、洗濯用の「粉石けん」は店で売られていないところも多いなどほとんど見たらないので、液体石けんを主に授業を進めている。
4. 温かい着方、涼しい着方
 - ①吸水性と吸湿性の違い
 - ②温かい空気はどこから来るのか、暖かい空気はどのように動くか
5. 温かい住まい方、涼しい住まい方
 - ①伝統的な日本家屋は、夏向きか冬向きから考察させる
 - ②機密性が高い家屋とは、いつからそうになったのか（歴史的背景：オイルショックから考えさせる）
 - ③通気と、換気の違い ④自分の部屋の掃除、ビフォー、アフターを実践させる
6. 暮らしの中の様々なマークを知る
 - ①自分の生活の中にあるマークの意味を調べ、その意味、役割を知る
 - ②環境教育（3R）とは
7. 基礎縫い

マスコット作り

 - ①玉結び、玉どめができないと何もできない。
 - ②かがり縫い ③ブランケットステッチ（市販品とそっくりにでき、達成感大きい）
8. 役に立つ小物

刺し子（日本の伝統を知る）のティッシュケースカバー

 - ①なみ縫い ②半かえし、本かえし縫い ③かがりぬい ④ボタンつけ

- ⑤ミシンの使い方（教科書を見てやらせる。ボビンは各自買わせ、下糸を巻かせる）
（ただし、安全管理の面から針の固定、縫い目の強さ調整はあらかじめ授業前に確認する）

9. 3つの色の栄養素

- ①自身の食事を振り返る ②バランスが良い食事とは（3：2：1の比率）
③砂糖の量、油の量について、糖度計などを用いた実践（ジュースの糖度計測）

10. 計量の基礎

- ①小さじ、大さじ、計量カップの使い方
②上皿はかりの使い方 ③重量、容量換算（算数と関連させて演習問題を行う）

11. ご飯と味噌汁

- ①ご飯をじゃこお焼きにする、青菜ゆで
②味噌汁（青さ）、芋餅
③ジャガイモの粉ふきいもを今の学生は知らない、水からゆでる食材、湯からゆでる食材を教える、
粉ふきいもの作り方とその原理、さらにはそれを片栗粉と共につぶし粘りを出させ、丸め、炒めて焼く料理につなげる（一つの食材で、様々な原理、調理方法を伝えた）

(7) 教科の目標・学びの特徴・評価の観点を徹底的に教える

家庭科の授業方法は実践・体験が主となるが、特に調理実習などの学生の様子を見てみると、仲間内で「実践が楽しかった、おいしかった」で終わってしまっている。ワークシートを書かせると「自分が教師になったときにどう教えるか」ではなく、「作って楽しかった、おいしかった」等、「感

想」しか書けない学生が多く、最初に書いた「教師目線」が欠ける。そこで、まず家庭科とは何を目標としているのか、何を育成する科目なのか、教師としての評価の観点を明らかにした。さらに自分が教師となったとき、教師自身の授業評価ができる視点（PDCA）を持つことが新学習指導要領では明記されているので、その点についても伝えた。（表2）

表2 教科の目標

教科の目標

1. 家庭科で育てる資質・能力

教科の目標：生活の営みに係わる見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を次の通り育成することを目指す。

2. 各教科共通で育成する資質・能力の三つの柱→全ての教科が育成を目指す資質・能力としてこの三つの柱に沿った目標が立てられていることを、家庭科の教科の目標と照らし合わせて学ばせた。

- (1)「知識・技能」の習得：何を理解しているのか、何ができるのか
(2)「思考力・判断力・表現力等」の育成：理解していること・できることをどう使うか
(3)「学びに向かう力・人間性等」の涵養：どの様に社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか

小学校学習指導要領（平成29年6月）総説より抜粋

表3 家庭科の評価の観点、趣旨

観点	趣 旨
「知識及び技能の習得」 ○家庭生活に付いての知識・理解 ○生活の技能 ○生活を創意工夫する能力	○日常生活に必要な衣食住や家族の生活などに関する基礎的・基本的な 知識 を身に付けている。 その際、他教科での学びや生活経験を通して、学習内容の理解が深まり、 知識の定着 が図られる。(教科横断的な学び) 更に習得した知識を社会における様々な場面で用できる概念としていくことができる。
「思考力、判断力、表現力等」	○日常生活に必要な衣食住や家族の生活などに関する基礎的・基本的な 技能 を身に付けている。 さらに、 主体的に活用 できる技能として習熟・熟達していく姿勢がみられる。
「学びに向かう力、人間性等」の涵養	○家庭生活について見直し、身近な生活の課題を見つけ、その解決を目指して、生活をよりよくするために考え、 自分なりに工夫 している。また、身に付けた力が 社会を生き抜く力 となる。 ○家族や地域の人々と関わり、協力しようとする態度、家庭生活をよりよくし、生活を楽しもうとする態度を養う。

(8) 家庭科の評価の観点

家庭科の評価の観点は目標で育成を目指す資質や能力をふまえたものであることを、表3に示す資料を用いて伝えた。

(9) 内容構成

小学校、中学校、高等学校の内容の系統性を明確にして枠組みを統一された意義を伝えた。具体的には、「A 家族・家庭生活」「B 衣食住の生活」「C 消費生活・環境」の3つの内容がいずれの校種でも共通となり、履修内容の接続性を持たせながら教えられる必要があること、小学校で

は、自己と家庭、現在及びこれまでの生活を学習対象として絞ることを伝えた。

(10) 学習活動の工夫

実践的・体験的な活動を通じ家庭生活への関心を高め、衣食住を中心とした家庭生活をよりよくしようとするために工夫する態度・能力、あるいは家族や社会と協力しようとする実践的で主体的な態度を育む。そのためには、必要な知識や技能・課題解決のために工夫する力を身につけさせる必要がある。それらについて、具体的に表4のような表現を用いて伝えた。

表4 学習活動の工夫

<p>①実践的・体験的活動の充実・・・実習・実験・調査・観察など</p> <p>当然、目標を達成するための活動である。その際気をつけるのは、児童の主体性を引き出す活動とすること(やらされ感ではなく)である。そのためには児童の発達段階、生活実態を十分把握し、感動や驚き・ワクワク感を生み出す活動でなければならない。</p> <p>特に、教師の思いが先走り児童の生活からかけ離れた内容や手段だと、実感がわからない、あるいは児童の生活に反映されなくなる。</p> <p>このように授業で展開される実践や体験は、児童が「次の活動を楽しみに待つ感覚＝ワクワクとさせる」内容を児童の実態を反映させながら工夫すること、更に教科横断的に他の教科で学んだ知</p>
--

識や技術を生かしながら、実生活に役に立つようにそれを応用していけるように導いていく工夫が要る。

②問題解決的な学習の工夫

自分の家庭生活の中から課題を見だし、自ら身に付けた知識や技能を生かしながら、自らの力でよりよくしようとする工夫ができるように、実生活と結びついた問題解決的な学習を展開していく。学んだことを生かして、主体的に家庭生活や社会生活に携わっていけるような「自分事」と感じることができる授業展開を行う。

③指導方法・指導形態の工夫

児童が「何を学ぶのか」、「何が身につくのか」、「何が身についたのか」、「どの様に役に立つのか・工夫できるのか」が具体的に理解でき、更に家庭生活の中で実際に継続的に生かしていける工夫をする。（各家庭に、習ったことが返せるか）

→教師自身が豊かな生活経験を持ち、理論に裏打ちされた生活の知恵、技能・手段を児童に伝えられる資質が必要。様々な生活の場面を想定しながら、徹底的に教材研究を行う事が重要。

④PDCAの活用

実践を行う中で自然に児童同士の意見交換、主体的な学びが発生するが、「意見をたくさん出した」「楽しく実習を行った」だけでは学びの意味が全くない。アクティブ・ラーニングをして、「みんながたくさん意見を言い合ったが、結局何を学んだのだろう」では意味がない。

教師自身が、「落としどころ（授業のねらい）」を明確にもってワークシートなどを用いて授業を展開し、児童に身に付けさせたい知識、技術がきちんと身についたか教師自身の授業評価ができる工夫が重要である。（PDCA サイクル）教師自身の授業評価を明確に行い、次の授業案作成に生かしていけるようことを、実際の指導案作成の方法を教える中で伝えた。また、授業評価を行うために、「ねらい（単元の目標）」を立てることも伝えた。

3-2. アンケート結果

家庭教材研究の授業を受けての感想、及び授業

で印象に残ったことを自由記述で記してもらい、内容別に分けて表5に示した。

表5 家庭教材研究の授業評価

○学生自身の変化

- ・自分は家事を家族任せだったので、こんな自分が子どもに教えられるか不安だったが実習をすると自分が裁縫が得意だったこと、調理も意外とできることがあることが分かり自信につながった。
- ・目に見える達成感が重要。成功体験として記憶に残る。・自分でできるという達成感を覚えた。
- ・今までは、先生をすぐ呼んでいたが本に載っているとおりでうまくいった。自分で挑戦してみるということができて、成長を感じ満足している。

→学生たちの話を聞くと、自分たちが家事を自宅で行わない理由として「自分は自宅生だから家事に携わらない」という者もいたが、「自分は家事ができない、自信がないからやらない」という自信のなさからあえて行わないという者が多いことが分かった。そういう学生も含め、授業では自分自身の力（読み込んで、理解する）で作品や料理を仕上げことを指示し、彼らもそれが実際に実践できたことで達成感を得て「自分にもできる」という自信を持たせることができた。

更にそれが、学ぶ楽しさにつながっている様子がうかがえた。

○教師としての資質

- ・身の回りの様々な質問に答えられることが、大切。子どもとの信頼感につながる。
- ・自分たち自身が、何気ない事象にも疑問が持つことが重要。・子どもの疑問に応える雑学が重要。
- ・家庭科は体験や実践を通して学ぶ教科なので私たち教師の側が経験をしておいたり様々な知識を持っていな
いと十分に教えることができない教科だと感じた。・「なぜそうなのか」理由を知る。
- ・教科書には載っていない、豆知識も多くあり、教師は話すネタが多い方が良いと感じた。
- ・なぜそうするのか、そうなるのかを考えることが大切だと知った。
- ・様々な内容を具体的に知り、行うことができ理解を深めることが大切。
- ・分野を広めて知識を深める必要がある。

→「なぜか」という事象の根底にある原理を知ることの大切さに気づく。

子どもの様々な質問、興味に適切に応えられることが信頼感を得る第一歩となる点、子どもに様々な気づきのヒントを与えられることが、児童の多様な意見が出されたときに授業の方向性（授業の目的・ねらいに導く筋道）を立てることができる点、そしてそのことが着地点が明確な授業構築につながる。

○授業を受けての気づき

- ・自分が思っていることより自分が知っていることが少ない。
- ・普段の生活で知らないことが多い、水からゆでるか湯からか、洗剤の選択
- ・知識が抜け落ち、思い出すのが大変だった。・小中学校の家庭科の内容が定着していないことに気がついた。
- ・現代人がいかに生活に対して興味を持っていないか気づかされた。
- ・教科書を中心に、どのようなことを必ず伝えなければいけないかと言うことを考えられた。
- ・他教科の観点を交えた学びをすることの大切さを感じた。

→便利な世の中で過ごす学生たちは、自分たちが特に工夫をして生きることもなく、漫然と生きていることに気づかない者も多い。そのような学生に、「君たちはただ漫然と生きていませんか？」ということに気付かせ、課題意識を持たせるきっかけとなった。

○授業のあり方、

- ・授業を受けるとき、その授業・様々な内容を具体的に知り、行うことができた。
- ・授業で何をすれば良いかで終わるのではない。家庭でこう生かせるということを具体的に伝える。
- ・自分の家庭や生活環境、地域と結びつけて学習していくことを改めて感じた。
- ・学んだことを家庭に返し家庭での疑問を学校で解決すると行った相互的、双方向的学びの重要性を実感した。
- ・ただ一方的に子どもに教えるのではなく、どうしてそうなるかについて教えていきたい。
- ・家庭科は、家庭生活を学習対象としていること、実践中心の講義を通じて改めて家庭科を学ぶ意義を確認できた。

→そもそも、なぜ家庭科という教科が有り、それを学ばなければいけないかが理解された。
学びは、授業だけで終わるのではなく実生活に還元することの必要性が理解された。

○家庭科の学び、家庭科を学ぶ意義

- ・雑学的重要性、家庭科は教科横断的、様々な知識を持つ教員の資質を感じた。
- ・教科横断的な学びが重要。・使う材料から学びを発展できる。・分野を広めて知識を深める必要がある。
- ・家庭科＝楽な授業から、様々な教科と結びついた奥深い科目だと印象が変わった。
- ・理科だと「将来同役に立つか」を説明することが難しいが、家庭科の授業は習ってすぐ役に立つので子どもたちに学ぶ意味を伝えやすい。

→家庭科は、教科横断的な科目で有り、しかも他教科の学びを直接児童の生活に生かせる教科であることが理解された。

○被服実習の感想

- ・コットンを実際に触ったことで、興味がわき学びが深まった。
 - ・縫い物は、縫い目を揃えたりボタンつけなど練習が必要であると思いつくと思った。
 - ・刺し子はこれまでの知識を加えた上で取り組めたので、楽しかった。
 - ・キットを使うことでと惑うことがなかった。 ・自ら説明書を見ながら作品作りを進めることが重要
 - ・自分で説明書を見ながら進めたり、段階に応じてミシンやアイロンを用いてきれいに作ることができ楽しかった。
 - ・ティッシュケース作り、何もできない状態ではなく、段階を踏んでやることが重要だと気づいた。
 - ・普通に縫うだけではなく、柄を作ることで自分の作品とすることができた。
 - ・刺し子は、自分でアレンジでき良かった
 - ・玉結び、玉留めを友達にやらせできないままにしていたが、マスコット作りで教科書を見てやはり難しいと思った、家でも練習しできるようになりうれしかった。
 - ・ミシンは苦手だが、周りのサポートや細かい指示が有り自分でもできて嬉しかった。
- 段階を踏み、ていねいに実践を積み重ねていくことの大切さに気づく
- 自分らしさが表現できることが、楽しさ、やる気につながっていく。 そのような教材選択の必要性、教師の教材選択力が問われることに気づきが得られた。

○献立の工夫

- ・調理実習は、内容が簡易だと現場で生かせる。
 - ・教科書で見ると実際にやるのでは違う、食材の色の変化が実践を通じて理解できる。
 - ・出汁を取ってやったので味が濃く家で飲むものとは違う味がした。
 - ・小学校家庭科でやらなければならない煮干しからだしをとることの意義に気づいた。
 - ・たった数個の食材で、あんなにもおいしいものができるとは料理はすごいと思った。
 - ・一般的なカレーなどの献立も良いが、一風変わった献立を作ることでもわくわく感が生まれ楽しめると感じた
 - ・調理実習は、簡単で家でも一人で作れそうなので実生活で生かせると感じた。 同じゆでるで、前は青菜今回は芋をゆでゆで方の違いが学べた。 またふかすことも覚え多くの調理法を学べた。
 - ・この授業を受け、食材から料理を作ろうと思うようになった。
 - ・2時間で行った調理実習の内容を家でもやりたいと感じた
- 直接体験が重要。 実践することで、理解ができる。 食材の選択、献立の選択の留意点は、「本物の食材を使うことが重要である」こと、「家庭でも反復して児童ができる内容」が重要であることに気が付く。 また、日常的に家にあるじゃがいもなど身近な食材だけでも多様な学び方ができることに気が付く。

○調理実習の意義

- ・料理を食べてもらおうという意識が育った
 - ・友たち作りの場として調理実習が有効だと感じた。
 - ・調理実習とは、単に調理に関する技術・技能を習得するのではなく、作業を通して協調性を身につける授業内容だと感じた。
 - ・調理実習では、自分たちで作ることによって、食べるのがとても楽しみになりおいしかった。
 - また、グループと仲良くなることができ仲間と話し合いながら活動に取り組むことでクラスの雰囲気も良くなり、学級経営にも役に立つのではと感じた。
- 調理実践は、お互いが意見を出しあい、関わり合うことで仲間作りに非常に役に立つ。 他者との協働を通じ、相互に学びあうことができる。 仲間同士の対話的な学びを実現することができる。

学習過程で先に知識・技術を身につけた学生が「先生」となって他の学生を教える環境が自然と育っていき、獲得した知識・技能が、共有され生かされていく場となり、学んだことの意義を確かめる場ともなっていくことが理解された。

○自分の変化

- ・いつもは気にしない衣服に目を付け、どんな繊維かなと気になるようになった。
 - ・過去の家庭科で習わなかったことをたくさん知った。洗濯時の注意点、食べることの意味、なぜ食べるのかを考えたりして、自分が何も気づかずに日々を過ごしていることを実感した
 - ・衣・食・住の細かな知識を学べ、生活の中でも約立つ内容ばかりだった。自分が食べているものがいかにかにバランスが悪いかについて再認識する機会となり、調理実習では自炊する楽しさを見いだせた
 - ・卵の扱いで今まで当たり前だと思っていたことが本当は余り良くないことを知り、概念が覆り面白かった
- 生活をあえて見直す機会を持つことにより、自分自身がよりよい生活者となろうという意識が育った。

○その他、テスト

- ・テスト問題が、専門的知識だけではなく、自分自身の身近な生活や、家庭の勉強にとどまらないものが有り勉強になった。
 - ・教員採用試験に出題されるという問いかけに敏感に反応することができ、知識が増えた。
 - ・用具の扱いは、ていねいに説明し安全に作業を行えるようにすることが大切だと学んだ。
 - ・定期的なテストで、知識の習得につながった
 - ・テストをすることで、多くのことを学ぶ。
 - ・欠席、遅刻、スマホ禁止と言う声かけがあったため、全員が授業に意欲的に参加していた。
- 教員採用試験という、小学校教員となるために必要な知識で出題されることが多い内容を具体的に伝えられることでより学ぶ意義、知識を定着させようとする意識を高められた。
- 定期的な確認試験により、知識定着が図られた。
- はじめ、しつけが授業成立のためには必要不可欠であることが理解された。

3-3. 授業評価より得られた効果

今回の授業改善では、基礎の基礎を教えるために実践をていねいにやり、また「自ら考えて実践しなさい」という少し授業者側からすれば学生を突き放したようにもみえる方法を行った結果、新福が述べているように学生の「生活への感性が高まる」²⁾すなわち、「漫然と生きている自分たち」に気付かせることができた。生活の中に疑問や課題すらもたない教師が児童を教えたとしても、実感が伴わない。今回改善の最大成果は、学生自身の深い気づきだと感じる。その他にも、以下のような効果が得られた。まず一つ目には教師自身が様々な分野に興味を持ち、そして幅広い知識を持ち、子どもの関心を高める授業展開をすること、子どもが持つ様々な疑問に応えることが児童の信頼を得ることが大切であることが理解された。つ

まり、子どもの質問に適切に応えられる資質が、両者間の信頼構築のためには何よりも大切な教師の資質である。またその手段として知識を得るだけではなく、教師自身が経験・体験を通して実際に学び、教材について多角的に、そして「実感」を伴って学ぶことが重要であることも体験的授業を通じ理解された。教師自身が広い知識を持ち、授業の導入でそれを生かして児童をぐっと自分にひきつけ「魅力的な授業」だと印象づけることが、児童の学びに向かう姿勢育成のためには何よりも重要であることにも、家庭生活に関わる「雑学」を伝えることで気づかせることができた。

二つ目には、実践的授業で学んだ知識及び技術は授業だけで完結するのではなく、学習した内容を各家庭生活に反映させ、そこで生かしていく姿勢を育むことの必要性も学ばせることができた。

更に家庭での実践に結びつけるためには、単に「お家に帰って家でもやりましょう」と児童に投げかけるだけではなく、学習内容を家庭生活の具体的な場面で生かせるのかについて児童に伝えられることも、ワークシートを用いた授業で大切であると理解された。すなわち、具体的な生活場面を児童に振り返らせ、思い描かせながら学習を進めていく授業展開が、児童がよりよい生活を実際に目指す生きた授業となることが理解された。

三点目には、被服材料（繊維）は、教科書に沿って文章で説明をするだけでなく実際に繊維見本に触りながら自分の五感で確かめることでことでより被服は何からでき、その性質は何かということに対する関心を高められること、同じく役に立つ小物についても、実際に作品を作ることを通じて、「三次元」で「物作り」を理解することができ、いずれも資料だけの説明で終わるのではなく触ってみる、作ってみるなどの体験を通じ、実感を伴って知識を定着させることの大切さが理解された。

作品作りでは一つの小物を作る中に、玉結び、玉どめを繰り返させ、返し縫いやなみ縫いなどを徹底的に訓練することで、「できなくても仕方ない」とこれまではやり過ごしてきた学生、ある意味家庭科はできなくても仕方がないとあきらめていた学生にも、それらの技術を身につけることの意義を伝えることができた。反復して練習をすることは面倒なことのように見えるが、その方がやがて自分でもできるという「できる楽しさ」、「達成感」につながることで学生の様子からもうかがえ、そのことが家庭科を学ぼうとする意識向上につながっていくことが理解された。

四点目には、ミシンを使う、キットを順番に仕上げていくことについては、「自分たちで説明書を読み理解する」ことにより、自分が教える立場になったらどう教えるかという教える側の意識を持つことにつながり作品作りという教材に対する自信と彼ら自身の達成感を育むことができた。作品作りは、布を買わせて一から作品を作り上げていくとも可能だが、今回のようにキットを使うことで、「自分にはできない」と被服は苦手だという意識があった学生にもやる気を失せさせてしまうことなく、積極的に授業に臨ませることができ、

学生たちにも「家庭科の被服製作で達成感を得て家庭での製作につながる教材とは何か」を考えさせることができた。また、キットだと最終的には形が同じ作品となるが、いろいろな太さや色の刺し子糸を用意することでオリジナルの作品（自分らしい世界にただ一つしかない作品）を作り上げていく楽しさを学生たちは得ており、「積極的に学びに向かわせる」には教師の「個（オリジナル）を生かす」工夫も要ることを学ばせることができた。

五点目には、調理実習でだしを煮干し、鰹節をとるなど「本物の味を知る」という体験があったことで、添加物を使う味とは異なることに気づくことができ、中食依存の学生が多い中、実際に素材から作ることでその良さに気づかせることができた。

最後に、定期的な試験実施が知識習得向上に結びついた。更に「教員となる自分」を意識させるために、その中に採用試験によく出る問題を伝えながら授業を展開し試験にもその内容を組み込んだが、そのことでより前向きに学ぶ意欲を喚起することができた。

全体を通しては、基礎の基礎を教える、原理を教える、他教科とのつながりを教えることにより普段生活している中で、特に何も気にせず当たり前のように過ごしていた学生たち自身が、日常生活の中に知らないことが多いことに気づき、生活に関心を持ち、よりよい生活を送ろうする視点を持つことに意義を感じさせることができた。そして「家庭科は小学校教科としてあるから、資格を得るために履修していた」という消極的姿勢から、「具体的により良い生活を送ることを考えていく際に必要な授業である」というように、家庭科についての見方、認識が変化した。学生の言葉に見られたように、家庭科は楽な授業から様々な教科の内容や、幅広い知識・技術と結びついていることを理解させることができた。自分たちだけの学びだけではなく、児童への接し方として、しつけの大切さ、教材の選択方法として無理なく達成感を得られる内容を選ぶ、自分らしさを表現できる楽しさを伝える、各家庭に帰って実践できる内容とする、他の教科と結びついた視点で教えることで知識の定着を図る、そのためには様々な雑学を

学び、児童の質問に適切に応え、信頼される関係を作るなどを伝えることができた。

4. まとめ

今回、授業改善を行うことで、学生の家庭科に対する認識を変えることができ、「生活を見直し、課題を見つけ、よりよい生活を送るための教科」だと理解を得ることができた。今後は、学生たち自身がまず生活力、生活技術を向上させ、生活の改善を目指す、あるいは目指そうとする姿勢を持つことを願う。また、家庭科と同じく実践的、体験的な学習活動が主となる生活科や総合的学習では、子ども成長を支え将来に繋げていくためにはどんな活動や体験、教材等を構成させるか本質だといわれている³⁾。今回の授業を通して学生たちが感じた雑学を含む幅広く、深い教材研究のを惜しまないその姿勢が大切であるという視点が、家庭生活だけではなく、社会においても主体的に課題を見つけ解決をしようとする力を育むための教材研究にもつながっていく。「思考力・判断力・表現力」等を育成する授業の在り方の要素として、「知的好奇心を喚起し、思考力・判断力・表現力等を育成するために適切な教材」がまずあげられるが、教師となる学生たち自身が自ら学び、体験し、感性を高める教材選びの能力を育成してほしいと思う。町田は、「大人が建前で接しようとすると、たちまち嘘くささを見破られてしまう。本根で接する。」⁴⁾と論じているが、教員となる自分自身がまず何よりも「生活者」となって日々を過ごしていくことが、心に響く授業者となるためには大切さだと考える。

また、学んだ知識・技能をつなげるプロセスとして、ウエビング⁵⁾のようにある教材を深く掘り下げてみていく方法があるが、今後はそのような方法も授業の中で具体的に紹介をして、教材研究を徹底的に行う一手段とさせたい。教材同士をつなげる視点、教科横断的な視点は生活科や総合的学習も(生活科の場合は教科として創られて以来)有している特質であるので、その方法を今後の講義でも学生たちに教授していきたいと考える。

また、深い教材研究はアクティブ・ラーニン

グで起こりがちな児童の様々な意見を単につなげるのではなく、理論や根拠をもって有機的に結び付け、児童の意見をつなげて結論に導いていくことになる。様々な見方や考え方を教師の言葉により明確化し、「何を学んだか」、「それが生活のどのような場面で生かせるか」という児童の思考力・判断力向上に繋げられるようになってほしいと思う。

今まで当たり前だと思ってきた事象の原理を知ること、物質的な変化が激しい社会情勢の中でも、自分がどのように何をどのように活用すれば良いか、一生活人として情報に振り回されず主体的に判断して生活することができる。また、学生に今まで獲得してきた知識、技能だけではまだまだ十分ではないという自分自身を省みるきっかけになったことも、子ども自身の問題意識を喚起する道筋を導いていくための教師側の技能育成のためには重要であったと思う。教師が問題意識を深く持たないまま授業を行っても、子どもたちには「自分事」として問題を探そう、あるいは自分事として課題に向き合うことはできず、あたりさわりのない課題発見と将来の生きる力に結びつかないその回限りの解決策しか出せないだろう。教科教育法の授業は、学生自身に指導案を書かせ模擬授業を展開することが主となるが、今回のように物事の多様な見方を知る、そして何よりも多様な経験を学生自身が体験することにより、子どもたちにも多様な経験をどう積み重ねていけば育成すべき資質・能力の三つの柱が満たされるのかがより具体的に理解できていくだろう。これは家庭科に限らず、生活科や総合的な学習の時間にも言えることである。今後も学生自身に「自分事」と自覚できる課題提供と実践内容について、学習指導要領の内容に沿いながら幅広い視野を持って考察を加えていきたい。

5. 最後に

いろいろと授業改善の成果について述べてきたが、本調査を通じて特に印象に残った言葉は、しつけ、けじめの大切さに対するコメントである。教科教育では、いかにその教科をうまく教え学習

成果を上げられる授業展開ができるかという点になりがちである。しかし、「人間性の涵養」という今回の新学習指導要領改訂の柱でもある目標に示されているように「教科の学力はついたらけれども、人間性に問題が残る」では自立した人を育てるという点では不完全である。まずもって学びに向かおうとする姿勢を育てるための環境作りが重要だと言うことを学生の言葉で改めて感じさせられ反省をした。その上で教科教育を行い、さらには「教科や領域の成果を統合して人間性を統合して人格完成を目指す学校教育は目指す」、「豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期する」(改正教育基本法前文2006年文部科学省)ののだということを今後は自分自身も再確認しつつ、いずれの教科においても学生にいていねいに伝えていきたい。学びの三要素の豊かな人間性にも、「自らを律しつつ他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心」が示されている。豊かな人間性というのは、学ぶこと以前に必要な人間性で有り、学びに向かう力の基礎部分であると考えるので、教師を目指す学生には授業の中で、実践を通じ学ばせていきたい。

また、わずか2、3年前と比べて本学の授業で学生の実践力(例えば、調理実習で同じ数の献立を作ることができない)が非常に低下していると感じる。学生の教員としての実践的な授業展開能力向上のために、自分自身の「PDCA」を今後もていねに行い、学生の「つまづきの原因」を探り対策を講じながら講義に反映させていきたいと考える。

引用文献

- 1) 駒田聡子, 実力向上を目指す家庭科教育のあり方について, 教育の探求と実践, 皇學館大学教育学部創設 10周年記念論集, 皇學館大学出版部, 165-166, 2018
- 2) 長澤由喜子編, 平成29年度 小学校新学習指導要領の展開 家庭編, 88-89, 明治図書, 2017
- 3) 野田敦敬, 「自立の基礎を養う」, 「自己の生き方を考える」総合のさらなる充実を目指して, 日本生活科・総合的学習教育学会会報 No.51, 1, 2017
- 4) 町田宗鳳, 現代に欠けている「つながり」とは何か, 児童心理 (926), 11-17, 2011
- 5) 口羽章子・玉川和子編, 食に関する指導の展開と実践, 東山書房, 2005

参考文献

- 勝田映子著, 家庭科の授業 成功の極意, 38-41, 明治図書, 2017
- 角屋重樹編, 新学習指導要領における資質・能力と思考力・判断力・表現力, 文溪堂, 2017
- 中村和弘他編, 学級担任のためのカリキュラム・マネジメント～教科横断的に言葉の力を高める～, 文溪堂, 2017
- 財団法人総合教育研究所編, 新教育課程における教育内容や指導方法の改善－「読解力(PISA型)・豊かな心の育成－, 文溪堂, 2007

Examination of Teacher Education possible to do Practical Lesson

Akiko KOMADA

The sample of this paper included students aiming to become teachers. This study focused on the students' family lives, their own lives, and their comprehensive learning time — learning home economics through practical experience as a learning method — with the aim of improving home economics classes to enhance the learning environment and quality for children to be able to learn subjectively and realize the significance of learning. A questionnaire was conducted among the students to evaluate these classes, and the teacher training was investigated to see whether it strengthened practical teaching skills. It was found that the students, who were encountering various life experiences, developed an understanding of issues in daily life and realized that building a process to successfully handle a given issue or create something new; this prompted a sense of achievement that propelled their learning further. In addition, teachers realized that in-depth teaching materials with the ability to research and cross-curricular study about a single topic through experience along with broad knowledge and trivia is necessary to construct a lesson that children trust and grasp the meaning of learning. Moreover, they were made aware that an emphasis on discipline is essential in each experience to create an environment that fosters learning. At present, as students' ability to earn one's living is noticeably on the decline, it was suggested that careful guidance through practice is most effective for increasing leadership abilities while accommodating students' feelings.

Keywords: teacher education, home economics, the period for integrated studies, practical lesson